

リニューアルオープン **II**

# 茶の湯の

# 陶磁器“景色”を愛でる



薩摩南十瓢筆茶入 銘十寸鏡  
江戸時代・17世紀

変わりゆく日本橋がある。  
変わらない日本橋もある。



国宝  
志野茶碗 銘卯花塙  
桃山時代・16-17世紀  
(展示期間: 7月9日~8月7日)



重要文化財  
黒楽茶碗 銘雨雲 光悦作  
江戸時代・17世紀  
(展示期間: 8月9日~9月19日)

RE-OPENING II:

# TEA CERAMICS

— APPRECIATING SCENIC KILN EFFECTS

2022  
7|9(土)~9|19(月・祝)

PRESS RELEASE



三井記念美術館  
Mitsui Memorial Museum

瀬戸橋姫手指 銘有明 桃山時代・16-17世紀

リニューアルオープンⅡ

## 茶の湯の陶磁器

～ “景色”を愛でる～

三井記念美術館では、2005年開館以来の全館改修工事を、2021年9月から今年の4月まで実施いたしました。改修工事は空調機械設備の更新と、館内および展示ケース内照明のLED化、セキュリティ設備の更新、床の張替、エントランス・映像ギャラリー・ショップのリニューアルなど、全面的に行いました。

その竣工にあたり、ゴールデンウィークより館蔵品によるリニューアルオープンⅠ「絵のある陶磁器～仁清・乾山・永樂と東洋陶磁～」を開催し、引き続きリニューアルオープンⅡとして「茶の湯の陶磁器～“景色”を愛でる～」を開催いたします。新たなLED照明による展示をご堪能いただければ幸いです。

展覧会名	リニューアルオープンⅡ 茶の湯の陶磁器～“景色”を愛でる～ Re-Opening II: Tea Ceramics — Appreciating Scenic Kiln Effects
会期	令和4年(2022)7月9日(土)～9月19日(月・祝)※会期中、一部展示替えを行います。
開館時間	10:00～17:00(入館は16:30まで) ☛ナイトミュージアム 会期中毎週金曜日は19:00まで開館(入館は18:30まで)
休館日	月曜日(但し7月18日、8月15日、9月19日は開館)、7月19日(火)。
主催	三井記念美術館
入館料	一般1,000(800)円/大学・高校生500(400)円/中学生以下無料 ※70歳以上の方は800円(要証明)。 ※リピーター割引:会期中一般券、学生券の半券のご提示で、2回目以降は( )内割引料金となります。 ※障害者手帳をご提示いただいた方、およびその介護者1名は無料です(ミライロIDも可)。 ☛ナイトミュージアム割引:会期中毎週金曜日17:00以降のご入館で( )内割引料金となります。
入館	予約なしで入館できますが、1階アトリウムの受付で消毒と検温をお願いします。 37.5度以上の熱がある方は入館をご遠慮いただきます。入館にはマスクをご着用願います。また、展示室内の混雑を避けるため入場制限を行う場合があります。
会場	三井記念美術館 / Mitsui Memorial Museum [〒103-0022 東京都中央区日本橋室町2-1-1 三井本館7階] 東京メトロ銀座線「三越前」駅A7出口徒歩1分/東京メトロ半蔵門線「三越前」駅徒歩3分A7出口徒歩1分 東京メトロ銀座線・東西線「日本橋」駅B9出口徒歩4分 メトロリンク日本橋(無料巡回バス)乗降所「三井記念美術館」徒歩1分
読者からのお問い合わせ先	050-5541-8600(ハローダイヤル)
ホームページ	<a href="https://www.mitsui-museum.jp">https://www.mitsui-museum.jp</a>
その他	展覧会関連イベントについては、当館ホームページをご覧ください。

\*新型コロナウイルス感染拡大防止のため、開催内容を変更する場合がありますので、最新の情報は、当館ホームページまたはハローダイヤル(050-5541-8600)にてご確認ください。

報道関係の方からの  
お問い合わせ先

三井記念美術館広報事務局 担当:富樫、松井 TEL:03-3237-3123 / 080-5443-1112  
〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-13 神保町MFビル701 E-mail:jtogashi@annex-inc.jp

## 展覧会の趣旨

三井家が収集した茶道具の中で、その中心となるのは陶磁器といえます。なかでも茶碗や茶入、花入や水指などには、釉薬の変化や器の姿などに「景色」を感じ、そのインスピレーションから多くは文学的な銘が付けられています。

器の中に自然を見出し、わび・さびの美を感じる茶道具独特の審美眼を、「景色を愛でる」という括りを取り上げます。銘が象徴する名品の「景色」を、自然の景色を見るような心持ちで鑑賞していただきます。

### 展示構成と主な出品作品

\* | 広報用画像貸出作品

#### 展示室 1

## 茶碗

名碗とされる茶碗の多くには、その茶碗固有の「銘」や、その茶碗独特の器形や文様などにちなんだ呼び名、さらには所持者の名前にちなんだ呼び名などがありますが、それらの名称を決める大きな要素は、茶人の間で古くから共有されて来た「景色」という美意識です。

茶碗に限りませんが、その器の形や釉薬の窯の中での変化を、あたかも自然の景色を見るように器の中に景色を見出し、そこでひらめいた、いわばインスピレーションで付けられた名称が「銘」となります。そこに文学的な背景が加えられて教養の厚み加わり、和歌がイメージされると「歌銘」と呼ばれたりします。

このような美意識は、日本の茶の湯に独特のものであり、そこには自然の移ろいの中で感じられるわび・さびの審美眼が根底にあるものと思われます。竹の花入や茶杓なども、自然にできた竹の染みなどの絶妙な美的バランスを「景色」として評価し銘が付けられますが、茶碗などの銘も、それと同じ美意識の中に包含されるのではないのでしょうか。

図1は、千利休所持とされる高麗茶碗の古三島茶碗で、秀吉の袋師二徳が所持したとされることから二徳三島の名があります。この高麗時代の象嵌青磁の流れをくむ茶碗を三島茶碗と呼んでいますが、見込みの文様が三島曆に似ているところからの名称といわれます。これも見込みの文様の景色を、茶人が曆に見立てた例といえます。

図2は、高麗茶碗のうちの粉引茶碗。素地に白泥を掛け、その上に透明釉を掛けて焼く粉引ですが、下半部に水分が浸み込んでベージュ色に変色し、ツートンカラーのようになったところに「残雪」をイメージしたものと思われます。銘は小堀遠州の息子小堀正之（遠州流二世・1620～74）によるものと考えられます。



[図1]

古三島茶碗 二徳三島  
伝千利休所持 1口  
朝鮮時代・16世紀  
北三井家旧蔵



[図2]

粉引茶碗 銘残雪 1口  
朝鮮時代・16世紀  
北三井家旧蔵

図3は、高麗茶碗のうちの斗々屋茶碗。全体に枇杷色を呈するなかに一部薄青色に変化した釉景色が、あたたかも春霞がたなびくような自然景を連想させます。まさに「かすみ」の銘以外には考えられません。室町三井家十二代<sup>たかひろ</sup>高大（1908～69）が最晩年に枕辺に置いたという遺愛の品です。



[図3]\*  
斗々屋茶碗 銘かすみ  
1口 朝鮮時代・16世紀  
室町三井家旧蔵

図4は、高麗茶碗のなかでも日本からの注文による御<sup>ご</sup>本茶碗で、対馬藩の茶頭船橋玄悦<sup>げんえつ</sup>が、藩主の命により朝鮮の釜山で焼かせたものを玄悦茶碗と呼んでいます。立ち上がり強い椀形で、高台内の太い篋削りがそのまま高台脇から腰・胴へと渦状にめぐっています。この器形と景色から、檜などが生い茂った山を表す「まきたつやま（真木立山）」という銘が付けられています。



[図4]  
玄悦茶碗 銘まきたつやま  
1口 朝鮮時代・17世紀  
北三井家旧蔵

図5は、重要文化財に指定されている本阿弥光悦（1558～1637）の黒楽茶碗。黒い釉の一部が縦に筋状になっており、それを黒い雲の間から降りしきる雨に見立てて「雨雲」の銘が付けられています。箱書に表千家六代の覚々<sup>かくかく</sup>斎（1678～1730）が「光悦黒茶碗 銘雨雲」と墨書しており、覚々斎の命名と思われます。



[図5]\*  
重要文化財  
黒楽茶碗 銘雨雲 1口  
本阿弥光悦作 江戸時代・  
17世紀 北三井家旧蔵  
(8/9～9/19展示)

展示室 2

茶 碗

ここでは前期に国宝の志野茶碗<sup>うのはながき</sup> 銘卯花塙、後期に重要文化財の玳皮盞<sup>たいひ さんらんてんもく</sup> 鸞天目（8/9～9/19展示）を展示いたします。

図6は、当館の国宝、志野茶碗 銘卯花塙です。日本で焼かれた陶磁器の中で、国宝は2碗しかありませんが、そのうちの1碗です。絵具による絵付けで絵が描かれた陶磁器は桃山時代から始まりますが、その早いものとして志野や織部があります。この茶碗は轆轤<sup>ろくろめ</sup>目や篋削<sup>へらけず</sup>りが大胆に施され、志野釉の下に鉄絵で簡略な垣根が描かれています。この白い志野釉と鉄絵の景色から「卯花塙」の銘が付けられています。片桐石州（1605～73）の筆とされる箱書と貼小色紙があり、「やまさとのうのはな／かきのなかつみちゆき／ふみわけし／こちこそすれ」の和歌からの命名とされ、いわば歌銘ということになります。



[図6]\*  
国宝 志野茶碗 銘卯花塙 1口  
桃山時代・16～17世紀 室町三井家旧蔵  
(7/9～8/7展示)

展示室 3

(如庵ケース) 茶道具取り合わせ

如庵<sup>じょあん</sup>ケースでは、茶道具の取り合わせです。床には織田有楽筆消息。茶碗は、有楽所持として伝わる高麗茶碗の大井戸茶碗です。

図7は、織田有楽<sup>おだうらく</sup>（1547～1621）の八月二十日付消息で、不在中に訪ねてきた人へお詫びに酒樽を届けるという内容です。元和年間最晩年の消息と思われます。

如庵は有楽の号で、京都建仁寺正伝院に建てられた茶室の名でもあります。北三井家十代の高棟<sup>たかみね</sup>が明治40年頃に入手して東京麻布の三井邸に移築し、さらに昭和12年頃に大磯の別荘に移築されました。戦後の昭和45年頃に名鉄に譲られて犬山城の近くに移築されています。



〔図7〕  
織田有楽筆消息（八月廿日付 タベは云々）  
1幅 江戸時代・17世紀 北三井家旧蔵

展示室 4

花入・水指

正面ケースに川端玉章<sup>かわぼたぎょくしょう</sup>（1842～1913）の京都名所十二ヶ月のうち、1月から6月までを展示し、その右側のケースで花入と水指を、左側のケースで水指と建水を展示いたします。作品は、和物の信楽・備前・瀬戸・伊賀・仁清、そして南蛮物で、これらの中に應挙と呉春の風炉先屏風を加えます。

図8は、備前德利花入 銘雨後月。もとは德利だったものを花入に見立てたものです。写真で見ると、胴のぼた餅状の赤い抜けを雨後の月の景色と見立てた銘として解説してきましたが、最近、実はこの裏側の景色を見立てたのではないかと思うようになりました。裏側は展示の実物をご覧ください。

図9は、備前緋襷水指。この水指は大きな作品の中に癒着しないように藁を巻いて入れて焼いたもので、藁が土膚に反応した火色の変化が特に美しい作品です。火の襷のような景色から「緋襷」と呼んでいます。

図10は、信楽不識形大水指で銘が山猫<sup>やまねこ</sup>と付けられています。達磨が梁の武帝との問答で「不識」と答えたという有名な故事があり、この器形を面壁座禅の達磨に見立てて不識形と呼んでいます。表千家七代の如心齋<sup>じょしんさい</sup>（1705～51）が胴に「山猫」と直書しているところから銘は山猫とされています。なぜ山猫なのかはよくわかりませんが、如心齋なりの理由があったと思われる。

図11は、伊賀耳付水指 銘閑居<sup>かんきょ</sup>です。歪みのある器形に自然釉の発色と黒っぽい焦げが醸し出すわびた景色が美しい伊賀焼の水指です。すわりの良いわびた様子を擬人化して「閑居」の銘が付けられたと思われます。銘は表千家五代の随流齋<sup>ずいりゅうさい</sup>の命名で、底に銘を直書しています。

図12は、瀬戸橋姫手水指 銘有明<sup>ありあけ</sup>。腰まで掛かった瀬戸釉の変化で黒い中に黄色く半月形に残った景色を、夜明けに残る月になぞらえて「有明」と銘をつけたものと思われます。「橋姫手」は瀬戸茶入の分類で、艶のある黒褐釉が特徴ですが、水指でも使われます。



〔図8〕  
備前德利花入 銘雨後月 1口  
桃山時代・16～17世紀  
室町三井家旧蔵



〔図9〕\*  
備前緋襷水指 1口  
桃山時代・16～17世紀  
室町三井家旧蔵



[図10]

信楽不識形大水指 銘山猫 1口  
室町時代・15～16世紀  
北三井家旧蔵



[図11]\*

伊賀耳付水指 銘閑居 1口  
桃山時代・17世紀  
北三井家旧蔵



[図12]\*

瀬戸橋姫手水指 銘有明 1口  
桃山時代・16～17世紀  
新町三井家旧蔵

展示室 5

茶壺・茶入

展示室5では茶入を展示いたします。大名物で重要文化財の唐物肩衝茶入 北野肩衝 (7/9～8/7展示)をはじめ、中興名物の瀬戸茶入、膳所茶入、薩摩茶入などに、和漢朗詠集の古筆切や帖などを交えての展示です。

図13は、大名物の唐物肩衝茶入 銘遅桜です。足利義政 (1436～90) が、この茶入が天下の名物「初花」より早く世に知られたならば、この茶入が第一であったろうとして「夏山の青葉交りの遅桜 初花よりもめつらしき哉」という歌銘をおくったという伝承があります。

図14は、中興名物の瀬戸二見手茶入 銘二見です。北三井家二代の高平 (1653～1737) が元文年間 (1736～41) に入手した茶入で、二見手の本歌とされています。金葉集にある「玉くしけ二見か浦の貝しげみ まきえに見ゆる

松のむら立」からの歌銘とされていますが、この茶入に付属する松平不昧の添状では、小堀遠州が選び残された茶入のなかから取り上げたところから二度見の茶入との銘が付けられたと記しています。しかし伊勢国出身の三井家にとっては歌銘の方がふさわしく、北三井家九代高朗と十代高棟による明治天皇への献茶でも使われています。

図15は、中興名物の瀬戸落穂手茶入 銘田面です。本歌の茶入「落穂」は現在伝わらず、この田面が本歌並みに扱われています。銘は『伊勢物語』の田刈業平の段にある和歌「うちわびて落ち穂ひろうときかませば 我も田面にゆかましものを」から引かれた歌銘です。小堀遠州筆の和歌小色紙掛軸と、本歌「落穂」に添っていた消息と落穂茶入図の写しが掛軸になって添えられています。



[図13]\*

唐物肩衝茶入 銘遅桜 大名物  
1口 南宋時代・12～13世紀  
室町三井家旧蔵  
(8/9～9/19展示)



[図14]

瀬戸二見手茶入 銘二見 中興名物  
1口 桃山～江戸時代・17世紀  
北三井家旧蔵



[図15]

瀬戸落穂手茶入 銘田面 中興名物  
1口 江戸時代・17世紀  
室町三井家旧蔵

図16は、膳所肩衝茶入 銘楽々浪です。琵琶湖畔の膳所で焼かれた茶入で、近江にちなんで『夫木和歌抄』の和歌「さぎ浪や大津の宮に月すめば みえこそわたれ水尾崎まで」からの歌銘です。命名は下冷泉宗家によるものです。

図17は、薩摩甫十瓢箆茶入 銘十寸鏡です。瓢箆形の小振りな茶入で、胴の中央の丸い釉抜けの景色を鏡になぞらえて「十寸鏡」の銘をつけたものと思われます。十寸鏡は真澄鏡とも書き、よく澄んで明らかな鏡を指します。小堀遠州の好みで焼かれた十個の薩摩焼の茶入を、遠州

の号「宗甫」から「甫十」と呼んでいますが、この茶入にも底に「甫」と「十」の文字が彫られています。

図18は、藤原行成筆とされる雲紙和漢朗詠集の古筆切で、千利休所持として伝わったものです。『和漢朗詠集』の下巻「雲」の断簡で、漢詩と和歌が記されていますが、和歌は『新古今集』にある恋の歌「よそにのみ見て ややみなむ葛城の たかまの山の峰の白雲」がとられています。天地に藍や紫の雲形をすき込んだ料紙を「雲紙」と呼んでいます。



〔図16〕  
膳所肩衝茶入 銘楽々浪 1口  
江戸時代・17世紀 北三井家旧蔵



〔図17〕\*  
薩摩甫十瓢箆茶入 銘十寸鏡 1口  
江戸時代・17世紀 新町三井家旧蔵



〔図18〕  
雲紙和漢朗詠集切 伝千利休所持  
伝藤原行成筆 1幅 平安～鎌倉時代・  
12～13世紀 北三井家旧蔵

## 展示室 6

## 香合

小さな展示室6では、和物香合の名品と、永樂保全・和全の交趾写香合を展示いたします。

香合には銘が付けられたものは少ないですが、器形そのものの名称と、器形から想像した名称がつけられているものがあります。保全や和全の交趾写しの香合は、龍や獅子、鳥や草花などの器形からの名称です。志野重餅香合や織部砂金袋香合などは、器形になぞらえて付けられた名称で、器形に景色を見ているともいえます。

図19は、志野重餅香合です。鏡餅のような重ねた餅をイメージしての名称と思われますが、蓋甲の網目文様や、

胴の播座文様などから、もとは香炉を写したものと考えられます。しかし茶の湯的には重餅とした方が茶席での機知と季節感が演出できるといえます。

図20は、織部砂金袋香合です。黄瀬戸や志野にやや遅れて始まる織部は、意匠性がより多様となります。この香合も巾着形の器形で、緑釉の余白に鉄絵で幾何学的な文様が描かれています。もとは蓋付の小壺として作られたものと思われ、砂金袋という黄金をイメージさせる名称で香合としているところに茶人の遊び心がうかがえます。



〔図19〕  
志野重餅香合 1合  
桃山時代・16～17世紀  
室町三井家旧蔵



〔図20〕\*  
織部砂金袋香合 1合  
桃山時代・17世紀  
室町三井家旧蔵

展示室 7

楽茶碗・紀州御庭焼

展示室 7 では、展示室 4 に引き続き、正面ケースに川端玉章（1842～1913）の京都名所十二ヶ月のうち、7月から12月までを展示し、その右側のケースで館蔵の楽茶碗の中から、初代長次郎、三代道入、五代宗入、六代左入の作品と、表千家九代了々斎の作品を展示いたします。左側のケースでは、文政 2 年（1819）と同 10 年（1827）に紀州藩十代藩主の徳川治宝（1771～1852）が、和歌山の西郊西浜御殿偕楽園で行った御庭焼で焼かれた作品と十一代藩主徳川斉順の清寧軒焼を展示いたします。

図 21 は、楽家初代長次郎（?～1589）の重要文化財黒楽茶碗 銘俊寛です。添状では、千利休（1522～91）が薩摩の門人の依頼で、長次郎の茶碗を三碗送ったところ、この茶碗を残して二碗は送り返されてきたので、『平家物語』にある鬼界島に一人残される俊寛の故事にちなんで命名されたと記されています。俊寛僧都というイメージにぴったりのたたずまいに、銘の不思議ささえ感じられます。

図 22 は、通称「のんこう」で知られる楽家三代道入（1599～1656）の重要文化財赤楽茶碗 銘鶴です。この茶碗も『平家物語』に登場する源頼政の鶴退治からの銘で、胴に刷毛塗りされた黒い景色を、「黒雲一むら立ち来って、御殿の上になびいたり」として知られる鶴の出現に見立てたものと思われます。

図 23 は、楽家六代左入（1685～1739）の黒楽茶碗 銘真紅です。左入は晩年に「左入二百」と呼ばれる赤と黒の茶碗二百碗を焼いており、それぞれに表千家七代の如心斎（1705～51）が銘をつけています。この茶碗はかせた膚の半筒茶碗で、「真紅」の銘が付けられています。黒茶碗に真紅の銘は不思議ですが、かせた黒膚の奥に真の赤を感じたのかもかもしれません。

図 24 は、北三井家六代の高祐が、徳川治宝の御庭焼に参加して、高祐が手造りした偕楽園製の赤楽茶碗です。胴に雁が飛ぶ簡略な絵を描いていますが、秋の雁行の景色に、二百十日頃に吹く野分のイメージを重ねて命名しています。



[図21] \*  
重要文化財  
黒楽茶碗 銘俊寛  
長次郎作 1口  
桃山時代・16世紀  
室町三井家旧蔵  
(7/9～8/7展示)



[図22]  
重要文化財  
赤楽茶碗 銘鶴  
道入作 1口  
江戸時代・17世紀  
室町三井家旧蔵  
(8/9～9/19展示)



[図23]  
黒楽茶碗 銘真紅  
左入作 1口  
江戸時代・18世紀  
北三井家旧蔵



[図24]  
赤楽雁絵茶碗 銘野分  
三井高祐作 1口  
江戸時代・文政2年(1819)  
北三井家旧蔵

以上、茶の湯の陶磁器のなかで、釉薬や器形に“景色”を見い出し、ひらめいた銘をつけて鑑賞し、さらに古典文学や和歌の世界に想いを馳せて鑑賞するという、茶の湯独特の審美眼と美意識をご堪能いただければ幸いです。



リニューアルオープンⅡ

茶の湯の陶磁器～“景色”を愛でる～

展覧会広報用画像について

展覧会の広報用貸出画像データ/読者プレゼント招待券をご希望される方は、下記ご確認の上お申し込みください。

- \* 画像は展覧会の広報用としての使用に限らせていただきます。展覧会終了後の利用、また二次利用はお断りしております。
- \* 画像掲載にあたっては、【記載クレジット】を必ずご記載ください。
- \* Webサイトで掲載の場合は、必ず画像にコピーガードをかけてください。
- \* 読者プレゼントの際には作品画像を掲載し、展覧会会期中にご紹介ください。またお手数ですが、招待券プレゼントの受付・発送などは貴社、貴編集部にてお願いいたします。
- \* ご掲載紙・誌等は広報事務局までご送付ください。

〔貸出画像リスト〕 作品掲載にあたっては下記の情報をご明記ください			
図3	斗々屋茶碗 銘かすみ 1口	朝鮮時代・16世紀	三井記念美術館蔵
図5	重要文化財 黒楽茶碗 銘雨雲 1口 本阿弥光悦作	江戸時代・17世紀	三井記念美術館蔵 (8/9～9/19展示)
図6	国宝 志野茶碗 銘卯花塙 1口	桃山時代・16～17世紀	三井記念美術館蔵 (7/9～8/7展示)
図9	備前緋襷水指 1口	桃山時代・16～17世紀	三井記念美術館蔵
図11	伊賀耳付水指 銘閑居 1口	桃山時代・17世紀	三井記念美術館蔵
図12	瀬戸橋姫手水指 銘有明 1口	桃山時代・16～17世紀	三井記念美術館蔵
図13	唐物肩衝茶入 銘遅桜 大名物 1口	南宋時代・12～13世紀	三井記念美術館蔵 (8/9～9/19展示)
図17	薩摩甫十瓢筆茶入 銘十寸鏡 1口	江戸時代・17世紀	三井記念美術館蔵
図20	織部砂金袋香合 1合	桃山時代・17世紀	三井記念美術館蔵
図21	重要文化財 黒楽茶碗 銘俊寛 長次郎作 1口	桃山時代・16世紀	三井記念美術館蔵 (7/9～8/7展示)
読者招待券	5組10枚まで受付	※申し込み受付は 2022年7月8日まで	

お申し込み方法

当館ホームページ「プレスの方へ」ページの申込フォームに必要事項を入力し、お申し込みください。

入力いただいたアドレスに広報事務局よりメールをお送りします。



三井記念美術館ホームページ「プレスの方へ」ページ  
<https://www.mitsui-museum.jp/press/press.html>

プレス関係の方からの お問い合わせ先	三井記念美術館広報事務局 担当:富樫、松井 TEL:03-3237-3123 / 080-5443-1112 〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-13 神保町MFビル701 E-mail:jtogashi@annex-inc.jp
-----------------------	--